

田川地区水道企業団

伊良原ダムと1市3町をつなぐ協働による浄水施設



↑ 赤村にある水道企業団の事務所。構成団体から派遣される職員を中心に約15人が勤務し、併設された浄水場で田川地区に送られる水が浄化されています。

田川地区水道企業団派遣
島本翼（糸田町）



設立から30年にわたって広域連携でライフラインの水利と向き合い、ようやく伊良原ダムの完成を迎えました。

水が各地に届くまで



伊良原ダム

田川地区水道企業団が田川市・川崎町・糸田町・福智町の各構成団体に配水するための日量27,000m³の原水を確保。



流量調整弁室

伊良原ダムから流れる水を取水。みやこ町のこの場所から、赤村にある田川地区水道企業団まで送水されています。



企業団浄水場

取水した水の不純物のろ過や水質浄化のための薬品の注入など、10以上の工程を経て水が浄化されています。



水質検査

原水や浄水処理後など、各工程の水の濁度や水質を検査。精密な浄水機器によって、水質の変化を常時確認しています。



調整池

赤村の高所に設置した配水池から、高低差を利用した自然流下で送水。電力ポンプを使用することなく各市町へ配水されます。

これまで田川地域の水は、水源の大部分を地下水や表流水に依存してきました。しかし表流水は生活排水の汚濁、地下水は炭鉱の坑道水や地質の影響で鉄・マンガンなどの残留物を含み、水質に問題を抱えていました。地下水取水による地盤沈下の恐れもあり、良質な水の確保と安定供給は長年にわたる大きな課題だったのです。

そこで伊良原ダムからの受水による課題解決を目指して、平成元年に田川市・川崎町・糸田町・福智町の4団体で田川地区水道

企業団を設立。伊良原ダムの原水を確保する水利権を取得し、各市町に水を届けています。ダム完成までの期間も北九州市からの分水を確保して必要水量を維持するなど、地域の上水道整備に欠かせない役割を担ってきました。

現在の人口規模では必要水量をダムの水でまかなえていますが、地元水源を活用しながら、水の安定供給に努めています。



高低差を利用して各家庭へ

3町が合併した福智町では、地域の地形の特性を生かして配水しています。神崎・金田地区と上野地区は全て伊良原ダムの受水で供給されていることが特徴。自然流下の低コストな送水で効率良く配水しています。

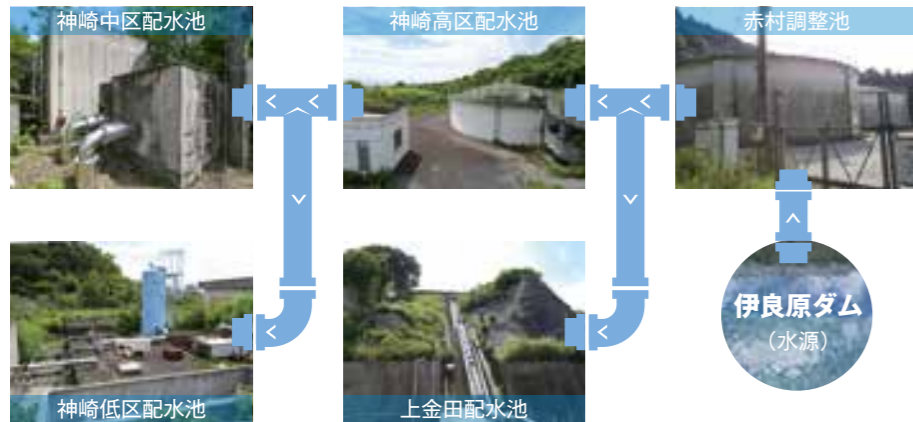
福智町役場水道課
竹宗知子



企業団から約30km離れた福智町にも動力を使わない自然流下で水が届けられます。

Pick Up Information 身近な節水ポイント

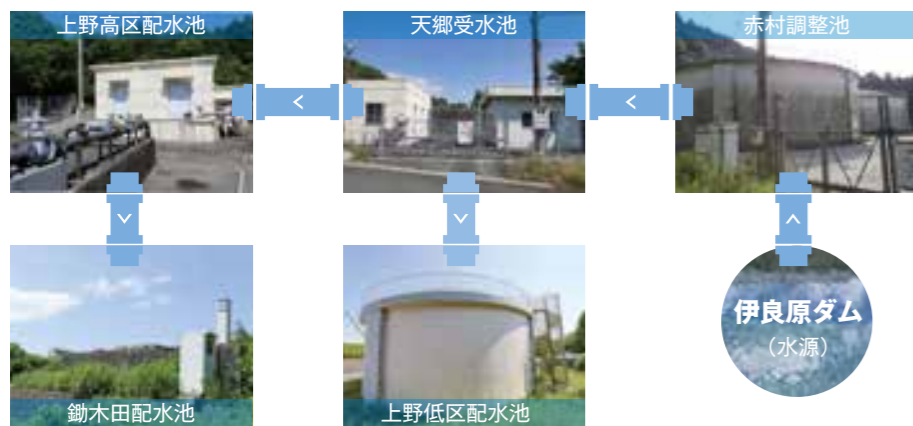
- ① 歯磨きで節水
水を出したままにしないでコップを使って歯を磨く。 → 約5ℓ節約
- ② 風呂の残り湯で節水
風呂の残り湯を洗濯や掃除、植木の水やりなどに使う。 → 約90ℓ節約
- ③ 洗車で節水
ホースの水をなるべく使わず、バケツを活用して洗車。 → 約210ℓ節約



DETA
給水人口 約7,000人
平均配水量 約3,000 t/日

全て自然流下で送水。中区と低区では水の勢いを弱めるため、減圧処理を行いながら各家庭に配水しています。

「神崎・金田地区」



DETA
給水人口 約1,400人
平均配水量 約1,000 t/日

天郷受水地から低区への自然流下と高区へのポンプアップを併用し、各家庭への水が届けられています。

「上野地区」



↑ 老朽化が進み漏水した銅管。状況に応じて最適な管への交換を進めています。

蛇口から出る水道水をそのまま飲むことができるのは、世界で約15か国しかないと言われています。世界一安全と言われる日本の水道水を支えているのが、消毒のための塩素。水道法で1ℓあたり管末0.1mg以上の濃度を保つことが定められています。塩素特有のカルキ臭が苦手な方もいますが、適度な残留塩素は、安全の指標とも言えます。

水の安全を保証する残留塩素

張り巡らせた約3百キロの水道管

町内に張り巡らされた水道管をすべてつなぎ合わせると、福智町役場から広島県にまで届く約3百キロにもなります。鉄製や塩化ビニール製の管などが用いられていますが、老朽化が進んでいる部分もあります。町水道課が漏水部分から随時交換を行っているほか、一定の区間を決めて、計画的に整備を行っています。